

世界観のなか

自然を生きる

アイヌは自然と共生する民といわれる。実際、かれらは自然にたいする深い智恵をもち、自然を神として敬ってきた。では、歴史のなかのアイヌは、具体的に自然とどのようにかかわってきたのだろうか。北海道に生きる私たちにとって、アイヌと自然の関係史を知ることが、アイヌの人びとにたいする深い理解とともに、見慣れた郷土の風景に厚みや奥行きをもたらしてくれるにちがいない。

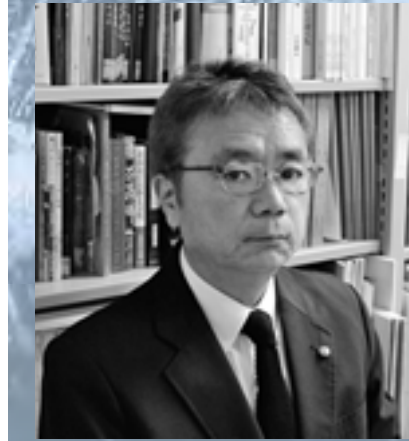
本連載では、北海道の山野河海と動植物をとりあげ、最新の研究成果にもとづいて、そこから浮かび上がる本州との交易、北方民族オホーツク人との関係といった話題もまじえながら、道内の研究者が10回にわたってアイヌと自然の関係史を語る。

火山噴火との共生、不毛にみえる湿原での暮らしの智恵、コンブが語る激動の古代、害獣に転落したシカとの関係史など、北海道の自然のなかをたくましく生き抜いてきた、アイヌの多様で活力に満ちた姿をご紹介します。

一万年の歴史

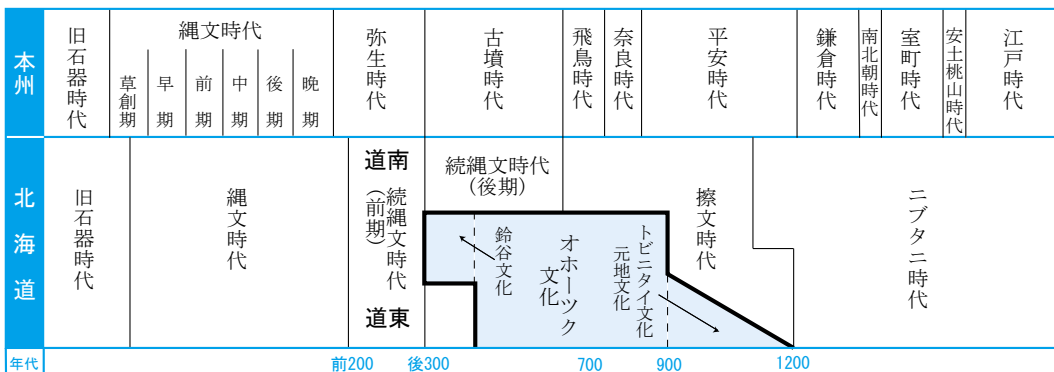
連載をはじめるとあたって、アイヌの歴史を簡単に説明しておこう。日本列島では北海道から沖縄まで縄文文化が展開した。3千年前になると、九州北部で朝鮮半島など大陸から渡来した人びとと、特異な形質をもつ縄文人が混じりあい、弥生人と水稻耕作文化が成立する。しかし北海道の縄文人は、弥生人との混淆や水稻耕作を受け入れず、狩猟採集の暮らしを続けた。この北海道縄文人の末裔がアイヌだ。

そのため北海道では、縄文時代以降、続縄文時代（本



州の弥生・古墳時代)、擦文時代（奈良・平安時代）、ニブタニ時代（鎌倉時代以降）と独自の文化が展開した^{*1}。ただしアイヌの祖先は、交易をつうじてつねに本州の人びとと深くまじわってきた。さらに、サハリンから北海道へ南下してきたオホーツク人とアイヌの祖先は、続縄文時代から擦文時代にかけて、1千年ものあいだ道内を二分していた。最近の遺伝子研究では、かれらとアイヌの祖先のあいだに混淆があったことも明らかになっている。

本連載では、縄文時代から江戸時代にかけて、一万年にわたるこの激動の歴史を背景に、アイヌと自然の関係をみていく。



北海道の考古学年表

の山野河海

瀬川 拓郎 (せがわ たくろう)

旭川市博物館館長

博士 (文学・総合研究大学院大学)。専門は考古学。主な著書に『アイヌと縄文』(ちくま新書)、『アイヌ学入門』(講談社現代新書/第3回古代歴史文化賞大賞)、『アイヌの歴史—海と宝のノマド』『アイヌの世界』(ともに講談社選書メチエ) などがある。

世界観のなかの山野河海

第1回の今回は、アイヌの世界観のなかの山野河海とは一体どのようなものであったのか、神話を手がかりに考えてみたい。

アイヌは、高山を「神々の舞い遊ぶ庭」と呼んで崇拜していた。そして、その山頂には沼があり、そこには海獣や海鳥、海の魚貝、コンブやワカメなどの海草が生い茂っていると信じていた^{※2}。つまり、神々が舞い遊ぶ高山の沼は海だったのだ。

では、なぜ山頂に海があるのか。

そこで興味深い話がある。海の神は男女2神いた。ただし女神は山中の家に住み、昼間気の向いたときだけ海へ出かけ、日暮れになると山中の家に戻るというのだ^{※3}。高山の沼が海だったのは、海の女神がそこで暮らしていたからだろう。だが、海の女神の食物は海のものではなく、山中の野草だった。アイヌにウバユリやギョウジャニンニクなどの野草を伝えたのも、山

中に暮らす女神だった。つまり海の女神は、アイヌにとって山の神でもあったのだ。

これらの神話で注目したいのは、アイヌの世界が大きく山と海の二つで構成されていたこと、さらにその二つの世界は本来一体のものとして強く求めあっており、そのため山の神は海の神のもとへ往還するというモチーフだ。

本州でも山の神は女神であり、彼女も季節になると山を降った。ただし、その向かう先は海ではない。田植えを控えた平地の田んぼだ。狩猟採集民アイヌにとって、世界は山と海で構成されていたが、本州の農耕民の世界は山と田で構成されており、そのため山の女神は平地の田んぼへ往還していたのだ。

ところが、同じ本州でも海辺で暮らす海民の世界観は、アイヌと同様、海と山で構成されていた。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』所収の神話では、^{へんざん}戀山(中国山地の鳥根県仁多町(現・奥出雲町))に坐す山の女神(玉日女命)に恋い焦がれた海の神(和爾)は、川を上って女神のもとへ向かう。『肥前国風土記』でも、海の神(鱈魚)は山の女神(世多姫)に会うため、毎年多くの魚を従えて川を上った。

日本の海民が伝えた山の神と海の神をめぐる神話、そしてそこに読み取れる世界観は、アイヌの神話やその世界観と見事に重なる。海の神が山の女神のもとへ通うという古代日本の海民の神話は、山の女神が海の神のもとへ通うアイヌ神話の、モチーフの反転といえることができる。

日本の海民とアイヌの神話の類似、そこに共通する世界観は、両者が農耕文化(弥生文化)以前の神話や世界観を伝えていたからではないか。日本列島の「縄文伝統」は、アイヌだけでなく、少なくとも古代までは、本州の山野河海に生きる人びとのなかにも色濃くみられたのではないか。アイヌの歴史や文化は、私たち日本列島人の原郷の扉を開く手がかりを与えてくれる。そう考えると心が躍る。

※1 瀬川拓郎 2016『アイヌと縄文』ちくま新書

※2 知里真志保 2000『和人は舟を食う』北海道出版企画センター

※3 早川昇 1970『アイヌの民俗』岩崎美術社